第 80 号　　平成14年3月15日

旭川医大病院ニュース

http://www.asahikawa-med.ac.jp/hospital/

（編 集） 旭川医科大学医学部附属病院
広報誌編集委員会委員長
廣 川 博 之

旭川医科大学医学部附属病院の基本理念・目標

病院長 牧 野 勲

基本理念

大学病院としての使命を認識し、病める人の人権や生命の尊厳を重視した先進医療を行うとともに、次代を担う国際的にも活躍できる医療人を育成する。

目 標

1. 病める人を思い遣る患者中心で心の通い合う医療を行う。
2. 全人的医療と先進医療との調和を図り、人間本位の医療を提供する。
3. 予防・健康医学などに積極的に取り組み、地域医療や福祉の向上に寄与する。
4. 病める人の人権を尊重し、生命の尊厳がわかる人間性豊かな医療人を育成する。
5. 未来の医療を創造し、その成果を国内外に発進する。

この度、旭川医科大学医学部附属病院の基本理念と目標が上記のように定められました。大学を取り巻く環境が厳しい現在において、また今後の国立大学独立行政法人化などをふまえて、私共の病院が自らの社会的役割を明確にして、実現すべき目標を定めて個性のある活動を展開するために設定されたものです。昨年秋に基本理念検討ワーキンググループが設けられ、多面的な検討が重ねられた結果、基本理念は総論を謳い、目標は現代医療の基本姿勢、現代医療技術の提供、地域社会への貢献、医療人の育成、研究成果の発進をモチーフにまとめたものであります。

今回、本文が明文化されましたので、今後は各種マニュアル作成などの際に活用していただき、職員の皆様に周知していただくとともに、院内で人目につきやすい場所に本文を掲げ、本学附属病院の姿勢を病院に来られる方々にも理解していただくことに役立てたいと思っております。

就任にあたって

事務局長
太　田　　貢

本年１月１日付で事務局長に就任いたしました太田　貢でございます。前任地の名古屋とは、日中の最高気温の差が10度以上もあり、また氷点下での生活の経験がないことから多少の不安もありましたが、早、２ケ月を過ぎようとしています現在では、この寒さが当たり前のように感じております。しかし、周りの人からは、旭川の本当の寒さはこんなものではないと嚇かされています。

今、旭川医科大学が抱えている課題は、再編・統合の検討、法人化への移行準備作業、自己点検・自己評価のまとめ、外部評価の実施、病院の再開発整備等々数多くあります。中でも、大学の将来の発展を見通した再編・統合の検討は急を要するものであり、また平成16年４月に予定されている国立大学法人への移行に向けての準備作業はここ１～２年の間に進める必要があります。

病院の再開発整備は、新設医科大学病院のトップを切って平成10年度から７カ年計画で進めております。その整備手法については、文部科学省の文教施設部からも注目を集めており、施設・環境計画委員会と施設課が中心となって患者さん第一の病院建設に知恵を出して頂いているところです。この整備は借入金による事業ですから、教職員も病院収入の確保には精一杯努力する必要があります。

旭川医科大学の更なる発展のために、皆さん方と情報を共有し、意見を交わし、そして明るい雰囲気の中で楽しく仕事をしたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

26年間の感謝を込めて

看護部長
新　井　多美子

私は北大病院の総婦長に「１年くらいで帰ってきても雇ってあげないから」という大層やさしい励ましの言葉に送られて、昭和50年10月に旭川医科大学附属病院創立準備室に参りました。当時の医科大学の周りは緑の水田風景にふさわしくない高層の真新しい建物と粘土がむき出た樹木の無い平地でした。それを見たとき、総婦長の言葉が一瞬、頭を過ぎりました。しかし気が付くと26年の歳月が過ぎ、人生で一番長く腰を据えた場所になっていました。この間２つの出来事は忘れることが出来ません。一つは開院の混乱からようやく一息ついたときに起こった看護婦不足でＩＣＵナースステーションを一時的に閉鎖したときのことです。病院長をはじめとして診療部門や事務部門の方々が一致協力して看護業務改善・整理や待遇改善に取組みに力を注いでくれたことは非常に感謝しています。もう一つは今まで「病院の廊下が狭いのも医療機器の置き場が無いのも築40年位は病院の立て直しは無いからあきらめて」といっていたのに突然降って沸いたような病院再開発の話です。昨年新病棟が完成し７月に移転して廊下の狭さはあまり変わりませんが廊下が物置になるという現象が解消し、患者アニメティの満たされた病棟が出来たことです。今後は残りの工事が順調に進むことを願っています。書いているとあれもこれもと思いますが26年間無事努められたことは皆様のご支援とご協力の賜物と感謝いたしております。本当にありがとうございました。最後に皆様のご健勝と旭川医大病院の発展を祈念いたします。

竿灌灌灌

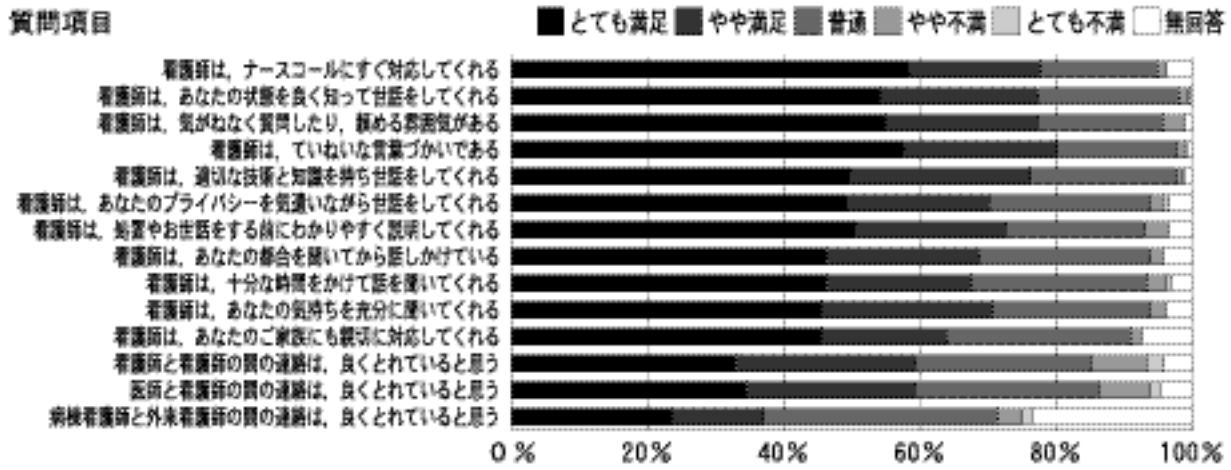
◆患者満足度調査を実施して◆

看護部　上　田　順　子

看護部では、平成13年７月２日に入院患者さんを対象とした「患者満足度調査」を実施しました。看護師の対応・入院生活全般における生活時間帯や設備など計33項目の質問に対して、305名の患者さんから回答を頂きました。看護師間や医師・看護師間の連絡、病棟・外来間の連絡の満足度はやや低く、医療者間の連携をさらに深め、もっとコンピュータを有効に活用することが患者サービスの向上につながるのではないかと思います。入院から手術までの日数、検査の待ち時間、室温や騒音、トイレの清潔さ等の項目は最も低い結果でした。患者さんと共に入院時から退院計画を立てる、検査日のスケジュールの打ち合わせをするなどインフォームドコンセントを図ることが大切です。また、入院環境に関する課題に関しては、病院再開発により改善されつつあるのではないかと思います。自由記載欄には「もっと早く調査してほしかった」「このような機会をありがとう」など多くの意見を頂き、医療は患者さんと共につくるものと実感しました。少しでも患者さんのニーズと期待に応えることができるよう、一つ一つの声を大切に検討して参りたいと思います。ご協力下さいました患者の皆様ありがとうございました。

以下、調査結果の一部を示します。

看護師の対応について



理学療法室だより
－量より質の時代へ－

理学療法士　朝　野　裕　一

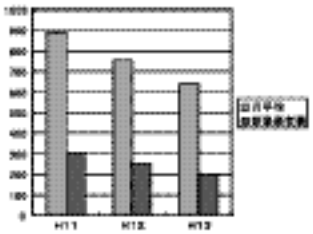
当室は、創設以来定員２名でやっております。少ないスタッフ数のため、これまで患者さんを含め、職員の皆様にはご迷惑をかけてきたかと思います。今までは、スタッフ数を増やす事ばかり考えてきましたが、少ないスタッフだからこそ、他の職種の方々の協力を得ながら、チームとしての効率的な、さらに質のよい治療を提供できるのではないかと、現在は肯定的に捉えています。

過去３年間の年度別延べ患者数と新患患者数の推移
（H13年度に関してはH13年４月～H14年１月まで）

	延べ患者数（月平均）	新患患者数
H11年度	10685人（890人）	308人
H12年度	9065人（755人）	251人
H13年度	6398人（640人）	199人

（理学療法室）

延べ患者数



最近の医療事情にともない、入院期間の短縮が図られている結果として、当室における年間の延べ患者数、新患患者数はともに減少傾向にあります（表参照）。この事はとりも直さず、短期間での、特に急性期における、効率の良い、治療アプローチが益々求められている事を示していると考えます。これに関しては、元来リハビリテーションとはそうあるべきなのですが、医師を始めとしたチーム・アプローチの重要性が改めて問われていると思います。リハビリテーションは理学療法から始まるわけではなく、また理学療法で終わる訳でもありません。特に、急性期からのリハビリテーションは担当の医師と病棟スタッフ（看護師）の協力なくしては成立しません。

これからの医療は、質が問われてくる時代になるでしょう。当室としても、量より質の時代へ転換する時期に来ております。どうか、皆様の今後とものご理解、ご協力をお願い致します。最後に、すっかり休刊状態の「理学療法室ニュース」第２号も近日中（年度内）には発刊しますので、ぜひ御覧下さい。

訪問学級短信

北海道東川養護学校
教 諭 小 西 穂（みずほ）

私たち訪問学級担当４人は、北海道東川養護学校での職員朝会を終えると飛び込むかのようにしてハンドルを握り、医大へと車を走らせます。小児科医局で部屋の鍵を受けて医大での勤務が始まります。

現在旭川医大附属病院に長期入院中の、小学生５人中学生６人が在籍し、週６時間の個別学習、月１回のカナダ国籍のＡＬＴマイケルとの合同学習、友だちと協力しあっての訪問学習カレンダー作り等々に、治療を受けながら懸命に向かっています。

昨年12月、子ども達が訪問学級カレンダーを携えて牧野病院長をお伺いしたところ、サンタさんの赤い帽子をかぶって出迎えてくださいました。数分後廊下に出て心地よい、緊張感から開放された子供たちは、満身に感激と喜びを漂わせていました。自己の活動が評価された成就感や温かく包まれた思い出は一人一人の体の中でフツフツと育ち、やがては揺るぎない力となって力強く生きていくことの支えとなることと思います。訪問学級の様々な活動を展開するに当たりまして、病院関係の皆様には枚挙に暇のないほどにご理解ご配慮をいただき、感謝の念でいっぱいです。誠に有り難うございます。

来たる３月の卒業式や修了式が、子供たちにとって、新たな夢や希望を抱いた明日への一歩となる節目であってほしいと願わずにはいられません。

拙文一筆したためましたことご寛赦いただければと存じます。

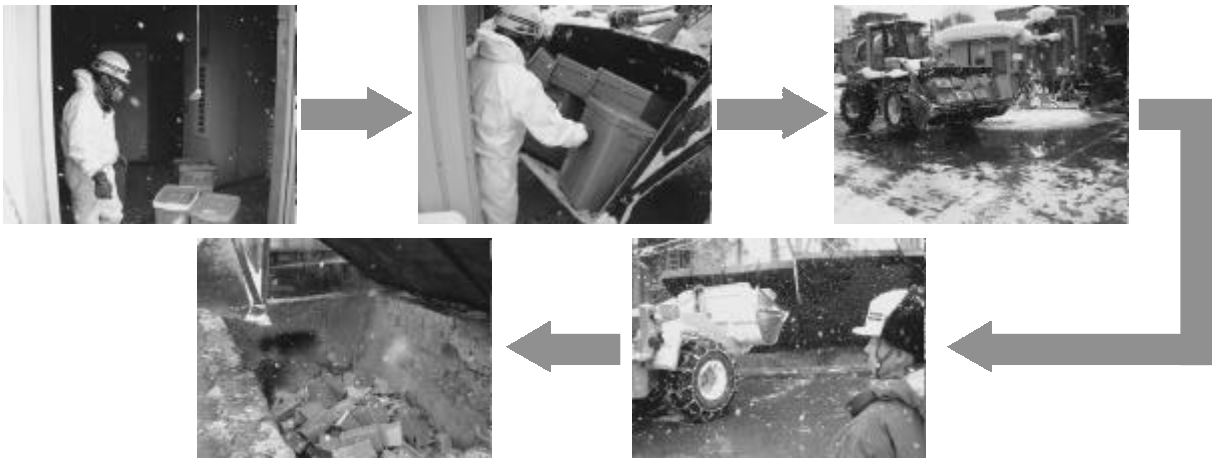
医療廃棄物処理場を見学

医療系施設に限らず廃棄物対策は、年々困難さを増し社会問題となっている。特に医療系廃棄物については感染・環境汚染など医療関係機関の責任が問われている。「都内の大学病院で清掃作業中の男性が、医療廃棄物として出された使用済みの注射針を誤って刺した「針刺し事故」でエイズウイルス（ＨＩＶ）に感染し、死亡したと疑われる事例」等により、本学においても医療関係者を中心に、全職種の者の廃棄物に対する関心が一層高まってきている。そこで、平成13年12月10日に看護職員10名、事務系職員７名が平成13年度廃棄物処理契約業者である「感染性廃棄物処理場」及び「廃プラスチック処理場」の見学を実施した。

参加者は処理場関係者の健康と環境汚染の懸念や、廃棄物に限らず社会全体が循環型リサイクル社会へ移行する必要性を実感すると同時に、大学附属病院としての排出責任を痛感した。また、廃棄物の適正処理について費用面・社会的な評価など経営管理上無視できない重要な問題を再認識し、見学は無事終了した。

今後もこうした廃棄物適正処理の教育・啓蒙を通して、各職員の資質向上と、廃棄物適正処理の徹底を図るものである。　（会計課）

感染性廃棄物容器の焼却過程



輸血部発云

病院輸血部門の在り方

国立大学医学部附属病院長会議常置委員会が提示したマネジメント改革素案が数々の問題を投げかけております。この案は、多分に経営改善に偏ったものですが、我々が関係する中央診療部門には特に厳しい眼が注がれており、一般民間病院との比較から、業態の整理統合、外部委託の導入による効率化を求める文言が次々と登場し、見ようによっては、民間病院が正しい医療形態であって、我々が誤った業態を取っているようにもみられます。はたしてこれでいいのでしょうか。確かに、国家公務員としての硬直した考え方、各部門のセクショナリズムなど、一般民間病院では考えられない不合理がないわけではありませんが、技術・知識の蓄積、責任の完遂などを無視した素案は、その前段でのリスクマネージメントからは矛盾した改革案となっています。

輸血部門に限ってみると、検査部との合同当直、感染症検査の外注化までは当然のことと考えますが、２名しかいない専門性を持った技師の削除、他部門からの派遣など輸血検査の実状に対応したものとは考えられません。自動化器機を用いた場合でも、直接患者の生命に影響のある検査で５％は判定できない場合があり、外注検査でも、やはり責任を持てない評価が返ってきたとき、いったい誰がどのように対応するのか明記されていません。いわゆる大変いい加減な改悪案となっています。さらに、現在我が国のＢ型、Ｃ型慢性肝炎、肝硬変患者の多くが輸血によるものとされておりますが、その中で、輸血用血液の適正使用が行われたら避けられたと考えられる患者も多数おられます。

医師は患者に危害を加えてはならない、いわゆるヒポクラテスの誓いをたてているにもかかわらず、無知からこれを破ってしまう例は、血友病患者への血液製剤使用によるＨＩＶ感染の事例からも明らかです。輸血医療に専門性を持たせない考え方は、大変危険な考え方といえます。このマネジメント改革案にある、リスクマネージメントという言葉だけの安全対策ではなく、現状が抱える問題に対して具体的方法を掲げた上で、経営改善を求めていくべきと考えます。　　（副部長　山本　　哲）

【薬剤部】

新薬紹介（39）

「リバビリン（レベトールCap.）」

慢性肝炎は、Ｂ型肝炎ウイルス（ＨＢＶ）とＣ型肝炎ウイルス(ＨＣＶ)の感染によるものが大半であり、治療としては、これらウイルスを排除することが目標となります。

従来、Ｃ型慢性肝炎の治療では、ＨＣＶに起因する肝臓の炎症を抑制するために強力ネオミノファーゲンＣ、ウルソデスオキシコール酸、コルチコステロイドなどが対症療法として使用されてきました。また1992年以降は、インターフェロン（ＩＦＮ）にＣ型肝炎の適応が認められ、ＨＣＶの排除目的にＩＦＮ療法が行われています。

しかし、１回のＩＦＮ治療でＨＣＶが消失し、肝臓における指標となるＡＬＴ（ＧＰＴ）の正常化が維持できる症例は、全体の約30～40％程度にすぎません。また、保険診療上規制のあったＣ型肝炎に対するＩＦＮの再投与が2000年４月に認められましたが、有効例は必ずしも多くはなく、加えて初回のＩＦＮ治療に一定の効果があった場合などだけに使用が限定されるという問題点等が残されています。

こうした背景の中、１月に採用になったのが抗ＨＣＶ薬のリバビリンです。本剤はＩＦＮ-αとの併用でＩＦＮ単独投与を上回る効果を示します。特に、ＩＦＮ単独での治療が難しい「genotype1b」の遺伝子型を持つＨＣＶによるＣ型慢性肝炎やウイルス量（血中ＨＣＶ ＲＮＡ量）が多い場合での効果が期待されています。

本剤は1972年プリン骨格を持つ核酸構造類似体として合成された経口剤で、ＲＮＡ及びＤＮＡウイルスに対して幅広い抗ウイルス活性を示すことから、海外ではインフルエンザを含むウイルス性呼吸器感染症、ヘルペス感染症、ラッサ熱、ラウス肉腫、腎症候群出血熱、ＡＩＤＳ、麻疹などに認められています。本剤の単独投与によるＨＣＶ ＲＮＡの陰性化は認められないものの、ＩＦＮ（特にＩＦＮ-α）との併用により有意に高い抗ウイルス効果が確認されています。

Ｃ型慢性肝炎での適応は、現在のところ必ずＩＦＮ-α-2b（イントロンＡ）との併用が条件となっており、標準投与期間は24週間と比較的長くなっています。

副作用としては、ＩＦＮに起因するものを含め、時期に応じて様々な症状（インフルエンザ様症状、倦怠感、吐き気、脱毛等）が出現します。また、ヘモグロビン・赤血球・白血球の減少など血液系の副作用が高頻度（50%以上）に認めらます。さらに、催奇形性や精巣・精子の形態変化が報告され、精液中に移行する可能性があることから、服用期間中と服用後６カ月間は毎月１回の妊娠検査や避妊等の慎重な対応が必要です。

なお、Ｂ型肝炎の治療においてもＩＦＮ療法が行われていますが、2000年11月に同じ経口剤であるラミブジン（ゼフィックス）が抗ＨＢＶ剤としての適応を取得したことで、治療の幅が大きく広がっています。　　（薬品情報室　藤田　育志）

『急ぐとも　性見て　名を見て　顔を見て』

医療事故防止啓発部会

看護職員の名称変更について

すでに皆様には新聞、テレビ等ニュースでご存知のことと思いますが、平成13年12月12日付で「保健婦助産婦看護婦法の一部を改正する法律」が公布され、平成14年３月１日から施行されました。使い慣れない表現ですが、本院でも同日から看護職員の名称を右表のとおり変更しましたのでよろしくお願いいたします。（庶務課）

変更前	変更後
看護婦長	看護師長
副看護婦長	副看護師長
助産婦	助産師
看護婦	看護師
看護士	
准看護婦	准看護師
准看護士	

平成13年度　患者数等統計

区分	外来患者数 初診	外来患者数 再診	外来患者数 延患者数	一日平均外来患者数	院外処方箋発行率	紹介率	入院患者延数	一日平均入院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日数(一般病棟)
	人	人	人	人	%	%	人	人	%	%	日
10月	1,074	22,155	23,229	1,055.9	47.81	45.34	15,739	507.7	84.62	90.81	26.14
11月	978	20,593	21,571	1,027.2	47.69	46.11	15,448	514.9	85.82	91.29	27.07
12月	893	19,533	20,426	1,075.1	46.63	45.46	15,658	505.1	84.18	87.97	28.58
計	2,945	62,281	65,226	1,052.7	47.38	45.64	46,845	509.2	84.87	90.02	27.26
累計	9,492	183,288	192,780	1,032.0	47.68	46.44	141,225	513.6	85.60	90.03	28.18
新設医科大学平均	12,265	167,083	179,348	959.1	57.14	44.45	147,469	536.3	89.37	89.93	27.00

（医事課）

ご存じですか

この冬、可愛らしいイルミネーションが点灯していました。中央診療棟Ｂの屋上に設えた舞台で人気アニメのキャラクター達が踊っていたのを、西病棟の４・５階の窓から眺めた方も多かったのではないでしょうか。少しでも子ども達に喜んでもらえるようにと始めたこの企画はとても好評で、「なくなったら寂しい」という声もあり、２月末まで点灯が続けられました。この子ども達のちょっとした笑顔の源は来年も見られます。４・５階ロビーが病院の隠れた夜景スポットになるかもしれませんね。

記事募集

編集委員会では記事を募集しています。院内に周知又は連絡する事項がありましたら、庶務課広報法規係（内線2118）までご連絡ください。

平成13年度 広報誌編集委員

委員長　廣川　博之（医療情報部　教授）
委　員　沖　潤一（小児科学講座　助教授）
野中　聡（耳鼻咽喉科学講座　助教授）
中井　啓文（脳神経外科学講座　助教授）
久保田勝秀（検査部　技師長）
藤田　育志（薬剤部　薬品情報室長）
上田　順子（看護部　副部長）
藤井　昇造（庶務課専門員）
山本　恵隆（医事課課長補佐）